

テニス選手の上達に関する事例研究

高橋 仁大（鹿屋体育大学）、有村 純太郎（鹿屋体育大学大学院）、児玉 光雄（鹿屋体育大学）

テニス、競技力向上、事例研究

1. 目的

筆者らはこれまでゲーム分析により、テニスの試合において必要とされる技術の傾向や、その評価方法について検討してきた。

本研究では、大学テニス選手の競技力向上の過程について概観し、そのゲーム内容の変化と自省報告から、テニスにおける競技力向上の一事例を報告するものである。

2. 研究の対象と方法

対象とした選手は大学テニス部に所属するA選手である。A選手は1999年4月に入学した。高校時代は県大会で優勝し、インターハイにも出場している。

大学入学後から2001年4月のリーグ戦までを研究期間とした。その間の1999年秋、2000年春・秋、2001年春の4期の試合を評価対象試合とした。各期の試合（大会）に対する目標と反省を試合の前後に記述させた。また研究期間の練習内容等については、当時のテニス部のキャプテンによる練習ノートを参考とした。

3. 結果と考察

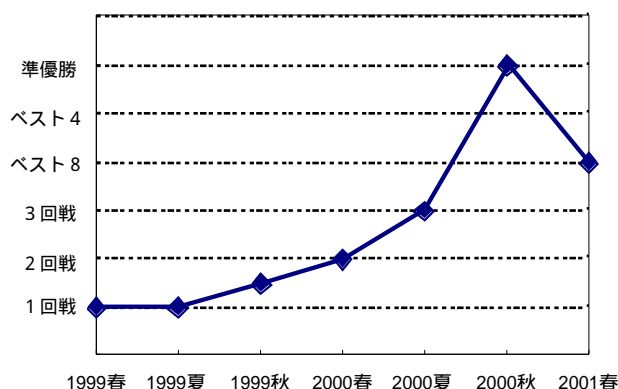
各期別の試合内容についてまとめたのが表1である。各項目はポイントが決まったときに用いられた技術を示している。それぞれ始まりはサービスとリターン、攻撃はアプローチ、ボレー、ドロップショット、スマッシュ、守備はパスとロブを含んでいる。

A選手の攻撃に注目すると、1999年秋と2000年春においてはおよそ17%程度であるが、2000年秋と2001年春ではそれぞれ約37%、28%とその割合が増えていた。またストロークについても1999年秋と2000年春においてはおよそ40%程度であるが、2000年秋と2001年春ではそれぞれ約25%、30%とその割合が少なくなっていた。

1999年秋ならびに2000年春で高い割合を示したストロークでポイントが終わるということは、1ポイントのラリーの中でお互いがベースラインにとどまった形でポイントが終わることを意味している。これは試合の発達段階でいえば、攻撃や守備の攻防がない未熟な段階の試合であるといえる。それに対して2000年秋ではストロークの割合が低くなり、攻撃の割合が高くなっていた。この期間にA選手は攻撃を軸にした試合展開を身につけたものと思われる。また2001年春では同様に攻撃を軸にした試合を展開しているが、ここで対象とした試合では相手も同様に攻撃を多く用いており、2000年秋に比べて守備のポイントがやや高くなっていた。

このようにA選手は2000年春から2000年秋にかけての期間で攻撃による試合展開を身につけたことで、試合に対する自信を深めることができたと考えられる。この効果は実際の大会成績にも反映しており、図1のように2000年春からの大会成績が向上したことが分かる。

発表当日は、補足資料を用いてさらに詳しい結果の報告



を行う。

図1 A選手の学生大会成績の推移

表1 各期別の試合内容

		始まり	ストローク	攻撃	守備	合計
1999 秋	A選手	29 (30.2)	39 (40.6)	17 (17.7)	11 (11.5)	96 (100.0)
	相手	35 (38.9)	29 (32.2)	23 (25.6)	3 (3.3)	90 (100.0)
2000 春	A選手	22 (36.7)	26 (43.3)	10 (16.7)	2 (3.3)	60 (100.0)
	相手	12 (38.6)	10 (32.3)	6 (19.4)	3 (9.7)	31 (100.0)
2000 秋	A選手	43 (28.7)	38 (25.3)	55 (36.7)	14 (9.3)	150 (100.0)
	相手	47 (38.8)	23 (19.0)	22 (18.2)	29 (24.0)	121 (100.0)
2001 春	A選手	44 (26.7)	49 (29.7)	46 (27.8)	26 (15.8)	165 (100.0)
	相手	47 (30.5)	32 (20.8)	52 (33.8)	23 (14.9)	154 (100.0)